

かんざわとこう おきなぐさ  
神沢杜口と翁草

### (一) 演者と神沢杜口

演者は退職後、京都にワン・ルームを借り、月に平均10日ほど滞在し、主に京都市内を徘徊、名所旧跡・祭・行事などの見聞記を「京日記」というタイトルで SNS に公開しております。

江戸時代中期の京都人「神沢杜口」も、奉行所与力を退職後、終生、京都市中を徘徊しつつ、見聞したり考察したことを「翁草」というタイトルの随筆集としてまとめています。これは、もし江戸時代にインターネットが存在していたとしたら、おそらくブログという形で公開していたのではないかと想像することができます。杜口は、さしずめ「江戸時代のブロガー（ブログを書く人）」と称しても良いのではないかと思っています。

以上のように、演者も杜口と似た嗜好があるところから、非常に親近感を感じ、杜口とその主著「翁草」の研究を始めた次第です（80歳まで1日5里～7里も歩いた杜口ほど健脚ではありませんが）。

健康寿命を長く保ち満85歳まで生き、最近の「人生100年時代」という提言にも示唆を与えてくれる神沢杜口ですが、調べ始めたところ、特に翁草の研究があまり進んでいないことが判明しました。

### (二) 神沢杜口の生涯

神沢杜口の杜口は号であり、実名は「神澤興兵衛貞幹（かんざわよへいさだもと）」といい、杜口の他に、可々斎・静座・其蝸庵（きちょうあん）の号があります。

宝永7年（1710年）、入江家に生まれました。この入江家は代々、京都西町奉行所の与力を勤める入江家と考えられます。10歳の頃までに俳諧を好み、俳人「爪木晩山」に就いて学び、満10歳の時、生家と同格の代々、京都東町奉行所の与力を勤める神沢家の養子となりました。

享保19年（1734年）、満24歳の時、養父「神澤彌十郎貞宜（やじゅうろうさだよし）」が亡くなり、その後を継いで京都東町奉行所の与力に就任します。

京都町奉行所は、東町・西町に分かれており、東西1ヶ月ごとの月番制を取っていました。それぞれ与力20騎（与力は騎乗できる格式を有するので「騎」と称する）、同心50人が配されていました。

与力といえば、テレビの時代劇によく出てくる「江戸町奉行」の「大岡忠相・遠山の金さんこと遠山景元」や「火付盗賊改方頭」の「鬼平こと長谷川平蔵」達の部下として、ドラマでも必ずと言ってよいほど活躍する、現代の我々にも馴染み深い役職です。

同心も時代劇によく出てきますが、与力は同心の上司、奉行の部下という中間管理職的立場にあり、御目見以下の「抱席御家人」、禄高は200石、現在にすると年収6～8百万円位ですが、「付け届け（役得）」も多く、正規年収の何倍にもなる者も居たそうです（現在の公務員は「付け届け厳禁」ですが、当時は、役得として黙認されていた）。そのため、神沢家も比較的裕福だったと考えられています。

しかし、江戸から赴任する奉行に対して、与力は「現地採用職員・実質代々世襲制」で、杜口も退職す

るまで京都東町奉行所与力から異動することはありませんでした（杜口は西町奉行所与力と、誤って書いている書籍やネット情報が散見される）。

杜口のキャリアは、就職時：証文方、26歳時：目付新家方増役、36歳時：目付筆頭、37歳時：勘定方増役、38歳時：川方、41歳時：公事方兼川方、退職時：公事方

- 「番方」 訴訟の受付と市中警備を担当する
- 「關所方」 關所された財物の処分を入札監督などを担当する
- 「証文方」 制札や各種証明書の発給や宗門改・鉄砲改・浪人改を行う
- 「新家方」 建築の届出・確認や道路管理などの都市計画を行う
- 「目付」 奉行所内外の監察業務を行う（後に新家方を統合して目付方とも）
- 「勘定方」 奉行所内の会計・公的な入札業務及び天領の年貢収納を行う
- 「公事方」 一般の刑事・行政を扱う
- 「川方」 鴨川の管理を行う

宝暦3年（1753年）、杜口が満43歳の時、本人の希望（病弱を理由に）で京都東町奉行所を退職。自分のあとを養子の彌十郎（杜口の養父と同名）に継がせました。

退職した年に妻に死なれますが、その後、養子一家とは同居せず、家禄の一部を現代の年金のように受け取り、京都市中の借家を（本人の弁では18回）転々としながら、市中涉獵や文筆活動に専念しました。翁草、塵泥（ちりひじ）などの著作があります。

翁草200巻（約1300話、原稿用紙換算で1万枚超）は、杜口の代表作と言えますが、初め（前編）の100巻は明和9年（1772年）一応完成。さらに後編100巻を加えたところ、天明8年（1788年）の「天明の大火」で後編の大半を焼失、なんと再度編述し直して、寛政3年（1791年）、死の4年前81歳の時、完成しました。

翁草は、一般的には随筆として分類されていますが、実態は他書の一部をそのまま写した部分が多いです。しかし、杜口の関心の赴くままに、歴史・地理・文学・芸能・有職故実・芸術・工芸・宗教・京都の事件や風俗、等々、百般に渡る直接・間接の見聞も少なからず記録していて、江戸時代を理解する上で有益な史料となっています。

寛政7年2月11日（1795年3月11日）、満85歳で死去。墓所は、京都市上京区出水通七本松東入七番町358 慈眼寺。友人に、俳人「与謝蕪村」、医師・文人「橘南谿」がいます。

### （三）神沢杜口、及び翁草に関する文献

神沢杜口、及び翁草について、部分的に引用している出版物やネット・サイトは、少なからず存在しますが、神沢杜口、及び翁草を本題とした文献は少なく、下記のものくらいしかありません。

①翁草（原典：歴史図書社刊「近世史料叢書」のうち、昭和45年）

明治38年（1905年）、国文学者の池邊義象（いけば よしかた）が、藤井五車楼本、富岡鉄斎所蔵本、京都府立図書館本（いずれも手書き写本）を合わせ校訂した本を4冊（1280話）にまとめて復刻したもの（解説：日本大教授・史学者「進士慶幹」）。

②翁草 [上・下]（現代語訳本：教育社新書「原本現代訳」55、昭和55年）

広島大教授・国文学者の浮橋康彦が、上記①のうち145話を口語訳し、注を加えたもの。現代語訳することに重点を置いており、記載内容の考証は貧弱。神沢貞幹を「カミサワテイカン」などと記している。国文学者の限界。

③足るを知る生き方 神沢杜口「翁草」に学ぶ(啓蒙書:講談社刊、平成15年)

北里大名誉教授の立川昭二が書いた。翁草から読み取れる神沢杜口の人物像を研究し、一般向けに解説した単行本。

④京都町奉行所の与力について - 神沢杜口「翁草」を素材として(研究論文:国書刊行会刊、昭和54年) 論文集:秋山国三先生追悼会編「京都地域史の研究」の一論文として、同志社大学名誉教授の井ヶ田良治が発表した。翁草に書かれている京都町奉行所関連の記事を基に、京都町奉行所与力の実態について考察している論文。

その他、神沢杜口及び翁草からヒントを得て書かれた文芸作品としては

①公事宿事件書留帳シリーズ(捕物帳小説:広済堂出版、幻冬舎刊、平成3年より)

「京都知恵に生きる」の著者:澤田ふじ子は小説家で、神沢杜口のファンでもあり、杜口が勤めていた「京都東町奉行所」と「公事宿(くじやど)」を舞台とした「捕物帳シリーズ」を22冊も書いています。

②文豪「森鷗外」が、翁草の「流人の話」「細川家の香木」を原作として「高瀬舟」

「興津弥五右衛門の遺書」を書いていることは、比較的知られています。

上記の各文献を読んで判ったことがあります。それは、翁草に記されている各話のていねいな検証・考察をしている研究が無いことでした。そこで演者は、少しずつではありますが、この点の研究を進めています。

#### (四) 翁草の記載内容の考察

この章では、演者が検証・考察した翁草の話の一部を紹介したいと思います。

翁草は、歴史・地理・文学・芸能・有職故実・芸術・工芸・宗教など、あらゆる方面に渡る200巻にも及ぶ分量なので、どこから取り上げ始めて良いのか?迷うところですが、現代人にも馴染み深い「今も京都に店舗・住居をもつ大商人」達について述べている部分から考察したいと思います。

杜口は、翁草に、現在の「三井グループ」の基礎を築いた「越後屋(三井) 八郎右衛門高利(たかとし)」、高利の実兄「三郎右衛門俊次」、「大丸」を創業した「大丸屋彦右衛門」ほかの伝記を載せています。

##### ① 翁草: 卷二「越後屋八郎右衛門成立の事」

有名な越後屋(現:三越百貨店)の三井高利は四男で、江戸で開業していた長男の三井俊次の店舗に修行に出されますが、さすが大「三井」の中興の祖であるだけに、非常に商才に優れていて、兄:俊次を驚かすだけでなく、兄から恐れられてしまいます。そして母親の面倒を看るよう、体よく郷里の松阪にもどされてしまいます。

ある朝、兄から一千文を渡され「これを元手に何か商いをしてみよ」と、いわばテストされるわけですが、高利は、その日の晩に二千文にして帰って来たのでした。

そのほか何をやらせても抜群の才能を示し、兄は高利を郷里に追い払うだけでなく、将来、商売敵となることを恐れ「江戸・京・大阪で開業してはならない」と約束させられます(しかし24年後、兄の死後、

江戸に出店できました。

以上は、三井グループの公式見解（三井広報委員会「三井の歴史」より）ですが、杜口の翁草では・・・、エピソードの大筋は合っているのですが、下記注※の通り、高利は俊次の実弟ではなく、奉公人（丁稚・手代）として、そして高利は、後年「三井家から三井の苗字を譲られた」と記述しています。

三井グループは傘下に「三井文庫・三井記念美術館」などの伝来文化財保存施設を有しており、学芸員級の研究者も擁しているため、公式見解の方が正確かと考えています。

杜口は、誰からか聞いた話で（この巻は「天明の大火」で焼失していない）、「伝言ゲーム」のように、人から人に話が伝わっていく間に、細部が変わっていったしまったとも考えられます。しかし、その確率は低いものの、杜口の記述のほうが事実である可能性も全く否定はできないのではないかと考えます。

### ※ 翁草：巻二「越後屋八郎右衛門成立の事」該当原典↓

・此（この）八郎右衛門事、元は勢州松坂の者にて、幼年の頃、三井三郎右衛門といふ京町人の方へ奉公に出る

・夫（それ）より八郎右衛門、次第に繁昌に随ひ、後には三井の苗字迄も譲る様に親く成しとぞ

### ② 翁草：巻二「大丸屋彦右衛門の出世」

大丸（現：大丸松坂屋百貨店）は、享保2年（1717年）、京都伏見京町四丁目に下村彦右衛門正啓が呉服店「大文字屋」を開業したことに始まります。2017年は、大丸創業300年記念ということで、大丸のネット・サイトに詳しい歴史がアップされましたが（現在は閲覧不可）、そこに記されていない珍しいエピソードがいくつか翁草に掲載されています。その真偽については現在、検証中ですが、その一例を挙げれば、今日誰でも知っている「大丸のロゴ・マークの起源について」があります。

現在、一般的には「創業時の『大文字屋』の名は、京都五山の送り火の『大文字』にちなんで付けられた。名古屋進出にあたって、『丸』の中に『大』の字をあしらった商標を使い始め、広く一般に『大丸』と呼ばれるようになった」とされており、会社も概ねこれを公式見解としています。

しかし、翁草には下記のように書かれています。

その頃（享保年間）、尾張名古屋はたいへんに栄えていて「殷賑（いんしん）の都」でした。彦右衛門も大阪出店の後、名古屋に出店を考え、まず名古屋に支店がある「京都二条通」の薬屋「井筒屋九兵衛」の運送目印荷札「丸の中に大の文字」のロゴ・マークを貸してもらいました。

井筒屋は、京都から名古屋へ荷物を頻繁に運送しており、すべての荷物にこのマークを付けていたので、多くの人がこのマークを見知っていたのです。そして、彦右衛門は自分の荷物にもこのマークを付け、既存の老舗の知名度を巧みに利用したのです。

この逸話は、現大丸は（公表し難いのか）公表していませんが、一度、大丸に真偽のほどを取材してみたいと思っています。

### ③ 翁草：巻六十六「牢抜の者の事」

杜口は与力（現：京都府警各部長クラス相当）だったということから、職掌柄、いわゆる「刑事事件」にも少なからず関与しています。その中から、面白い逸話を紹介します。

杜口が勤め始めて4～5年たった頃、とても珍しい事件が起きました。

当時、京都町奉行所では「六角獄舎」という牢獄を備えていましたが、ここで「集団牢破り？」が発生したのです。差し詰め日本版「大脱走（1963年公開の米映画）」といったところでしょうか？

六角獄舎は「六角通」と「神泉苑通」の南西角にあり、堀に囲まれた東西65m、南北53mの規模で、「本牢（一般牢）」のほか、「揚屋（上級牢）」「キリシタン牢」「請なし牢（無宿人等の牢:函⑤の①）」「女牢」などで構成されていました。

元文3～4年頃（1738～1739年）、獄舎の修理があり、この工事中、本牢に収容されていた囚人を各牢屋に分散したのです。

さて、請なし牢に入った囚人の中に「文七」という盗賊が居り、同牢の囚人達にある提案をします。

「オレはこの牢を抜け出る術を知っている！」

「命に関わるほど重罪の者は、オレと一緒に牢を出ないか？ もし失敗しても結局は死罪なのだから」

「しかし、軽罪の者は失敗したら死罪になってしまうから、止めておいたほうが良い」

で、どうやって牢を破るのか？

「オレは元々、銀山の金掘り人足だったのだ。だから土に穴を開けるくらいはカンタンなのだ」

「この請なし牢は、一部土間になっているから穴を掘ることができる」

ということで結局、文七のほかに「半三郎」「庄八」「その他2人」、計5人が脱獄することに決しました。

ある暗い夜に、文七はドコからか引き抜いた古い大釘を使ってドンドン掘り進めます。折しもツユ

時で地面は湿っていて掘り易かったさうで、数時間で牢から出られる穴を掘ってしまいました。

見廻り番が、1時間ごとに拍子木を鳴らしながら巡回するスキを狙って、全員牢外に出ます。そして堀の溝の傍にある「拷問場」の柱に飛び付き、拷問場の屋根からジャンプして塀を乗り越え、さらに堀を越え、5人とも見事？脱獄に成功してしまいました。

さて5人は思い思いの方角に逃げ散りましたが、庄八だけは、ふと考えました・・・？

「このようにうまく脱獄はできたが、草の根分けて捜されるだろう・・・、とても逃げ切れない！

いずれ捕まってしまうだろう・・・」

「ヨシッ！ 皆には悪いが、スグお上に申し出ることにしよう。そうすれば減刑されて死罪にならないかもしれない・・・」

そう考えて、直近の「京都東町奉行所」に駆け付け「ご注進！」と呼ばわたったのです。午前3時頃でした。

まず門番が気付き、宿直の与力、そして奉行の向井政暉へと報告されることとなり、向井は即刻

「牢屋修理担当」の与力「木村勝右衛門」を呼び出し、庄八や壊された牢の処置をさせたのはもちろん、その夜のうちに「目付役の同心達」に助っ人を付けて、脱獄犯捕縛隊を編成、出動させたのでした。

そして、文七ともう一人は、播磨だか摂津で探し出し、目付役の同心が召し捕って帰ってきましたが、半三郎ともう一人はついに行方がわからなかったそうです。

修理担当与力の木村勝右衛門は、牢内の土間に気が付かず、囚人を入れてしまったことは「不注意であった」ということで、しばらく「遠慮（出勤停止）」となりました。

面白いというか、興味深いのは、庄八は「注進の功」により、死一等を減ぜられたこと、主犯の文七ともう一人は罪が一等重くなり、同じ死罪でも「獄門首」に処せられたこと、与力の木村勝右衛門の量刑が意外に軽かったことでした。

そして、拷問場と塀が隣接していたのを引き離したとのこと。しかし、天明の大火後に再建された六角獄舎の間取り図(図⑤)を見ると、相変わらず塀のそばに踏み台となるような拷問具(三角木馬:図⑤の②)が置いてあります。最近の大阪「富田林署」における脱獄事件を連想してしまいます。

#### ④ 翁草：巻三十七「明智光秀・斎藤利三墓の事」

「本能寺の変431年目の真実」で画期的な仮説を発表され、一躍有名となった「明智憲三郎」さんは、最近、翁草：巻三十七にご自身のご先祖が出てくることを発見しました。

明智さんの家には、明智光秀の側室の子「おづる丸」の子孫であり、明治時代まで「明智」は名乗り難いので、「明田」という苗字に変えて、高祖父「明田鉄太郎」の時代(天保頃)「津軽藩」の「能 笛方」を務めていたという家伝が伝承されていました。

上記、巻三十七「明智光秀・斎藤利三墓の事」の粗筋は、以下の通りです↓

+ ----- +

都の某所に「能役者 笛」をしている「明田理右衛門」という人が住んでおりました。

明和8年(1771年:杜口と同時代)春、「粟田口」辺の「年寄五人組」より、「明田理右衛門」に「白川橋通三条下る」にある「明智光秀の墓」の裏にある家屋敷を譲るので住んでもらえないか?との話がありました。表の「借屋料」程度で良いのでとのこと。「あなたは明智光秀の縁者だから」というのがその理由でした。

理右衛門は、しばらく迷いましたが、抱屋敷(別宅)として譲り受けることにし、正式に京都町奉行所に届出もしました(杜口は元与力だったので、この話が耳に入ったのだと思われる)

+ ----- +

ここで言う「明智光秀の墓」は「明智光秀首塚」として、今も同じ場所に現存しています。演者も墓前の白川沿いを知恩院へ度々通り抜けたりします。

最初、明智さんは、この記事を見て「自分の先祖では?」と思ったそうです。その後、著書が売れて有名になったこともあり、調べてくれる人も出て、前述の高祖父「鉄太郎」の父「善十郎」という人が「津軽藩」に仕え始めた初代であることが、藩の記録から判明しました。

さらに最近になって「東山七条」の門跡寺院「妙法院」で、天明元年(1781年)に開催された「光格天皇 御即位記念能興行」に「明田利(理) 右衛門と善十郎」が笛方として出演していた記録(妙法院日次記)が見つかりました。業務日誌の記録なので脚色の無い一次史料です。

これにて、明田家は、理右衛門の時代まで、京都の能笛師であったのが、子供の善十郎の時代、津軽藩に仕官したことが確実となりました。

● 憲三郎—義雄—滝朗—潔—鉄太郎—善十郎—利(理) 右衛門

このように、なぜ地元民が明田理右衛門に(明智光秀墓付近に)住んでもらいたかったのか?についてはやや曖昧ですが、事実関係は正確であったことが理解できます。

※なお現在、明智さんは、理右衛門から「おづる丸」までの人名を探求していらっしゃいます。

#### ⑤ 翁草：巻百十七「本阿弥の話」

前記の明田理右衛門の話もそうですが、杜口は明智光秀に関して強い興味があったようで、翁草にいく

つか光秀に関する話を掲載しています。最近、演者が特に注目しているのが、この本阿弥の話です。

原典は下記の通りです↓

+ ----- +

明智光秀を信長公へ吹挙せしは本阿弥光正なり、後年、神祖、光正へ仰けるは、人を肝煎吹挙する事、卒爾にはせぬがよし、光秀が如き者すら凶らざる弑逆有り、況や常並の者いかなる事をか仕出すらん、汝等は諸家へ廣く立入る者なれば、一人共心得をすべしと御教誨有り、光正慎みて奉之、夫より本阿弥の家格として何方へも人を肝煎事なし、今も浪人の類、様々頼め共、右の由を以て断を申と、今の本阿弥十郎左衛門語りき

+ ----- +

以下、これをやや意識的に現代語訳してみると

+ ----- +

明智光秀を織田信長に推挙したのは本阿弥光正である。

後年「本能寺の変」の後、神君（徳川家康）は本阿弥光正に対し「人を推薦したりすることは、簡単に行わないほうが良い。光秀ほどの人物でもあのような謀反を起こすのだから、まして普通の人は何を仕出かすか判らない」。

「本阿弥家は、いろいろな家に入出入りすることが多いのだから、よくよく気を付けなければいけない」と教え諭したところ、本阿弥光正は慎んで聞いておりました。

それ以後、本阿弥家では、就職の口利き・世話などはしないことにしました。

今も浪人らしい者達が、いろいろ頼んで来るが、以上の事情があるのでお断りしていると、今の「加賀本阿弥」の当主「本阿弥十郎左衛門」は語った。（演者 訳）

+ ----- +

この話で最も重要なのは、冒頭の「明智光秀を織田信長へ推挙したのは本阿弥光正」という人物であるという部分です。

「本阿弥」という姓の家は、「ほんなみ」と読み、元々は刀剣のとぎ（磨研）・ぬぐい（浄拭）・めきき（鑑定）などを家職として足利尊氏に従い、代々、足利將軍家～織田信長～豊臣秀吉～徳川將軍家に仕え、室町・戦国・江戸時代を通じて名家でした。戦国末期には、書・陶芸・漆芸・出版・茶の湯など芸術方面にも進出した本阿弥光悦が有名です。分家が多く、加賀前田家、尾張徳川家などにも一族が仕えていました。

近年、明智光秀に関する書籍等は、数多く出版されています。特に、来年のNHK大河ドラマは「光秀の生涯」ということもあり、その出版数はさらに増えています。

しかし、どの出版物を見ても、この「本阿弥の話」が載っているのを見たことがありません。

明智光秀の前半生（織田家家臣となるまで）については不明な点が多いことで有名です。織田信長といつ頃から面識をもち、いつの時点で仕えるようになったのかについても、日本史の大きな興味深いナゾとなっていますが、この本阿弥の話を研究することで、そのナゾが解ける可能性もあると考え、鋭意専心、調査を進めております。

その結果、いくつかの興味深い事実も判りましたが、これらについては本演題の主旨から外れ、かつ時間も限られているので、また別の機会に発表したいと思います。

## (五) おわりに

以上、翁草には「玉石・真偽混合」の話が満載されており、それらは(四) ①～⑤のように検証・考察、等、十分に研究されているとは言えないのが現状です。

また、明治38年、池邊義象により活字化された際、記述内容別に一応の分類がなされていますが、不適切・不十分な点もあります。

好例を挙げれば、前述の「第百十七巻：本阿弥の話」などは、全く関係のない「茶坊主の話」という項目に入れられてしまっているため、明智光秀に関する希少な逸話にも関わらず、ほぼ周知されていません。

さらに、一話の中に多くの話を収録している場合も少なくなく、約1300話と言っても、それはタイトル数であり、実際はそれ以上の話(2000話を超えるか?)が掲載されているので、再分類が必要かもしれません。

もとより膨大な分量の翁草ではありますが、今後も演者は可能な限り、解明に取り組んでいきたいと思っております。

また、神沢杜口及び翁草の研究者も探しております。そのため演者は、インターネット上に研究成果を逐次公開しておりますが、まだ見つかっておりません。そしてさらに研究者がもっと増えることを願って止みません。

図① 神沢貞幹(蕪村「ふたりつれ」上巻より)



神沢貞幹

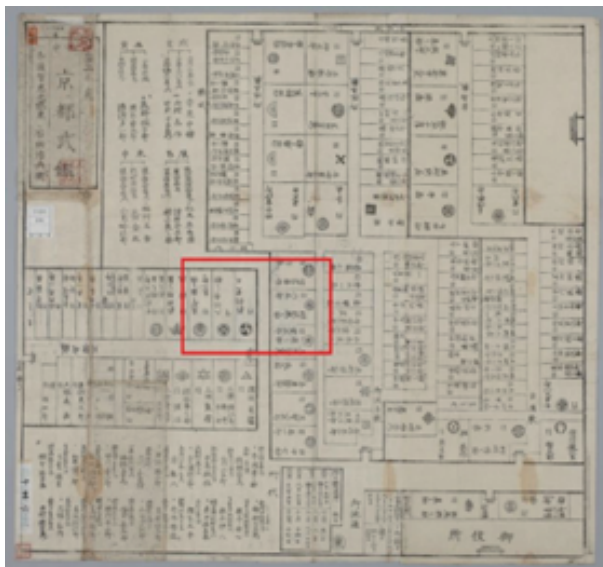
図② 翁草(写本)



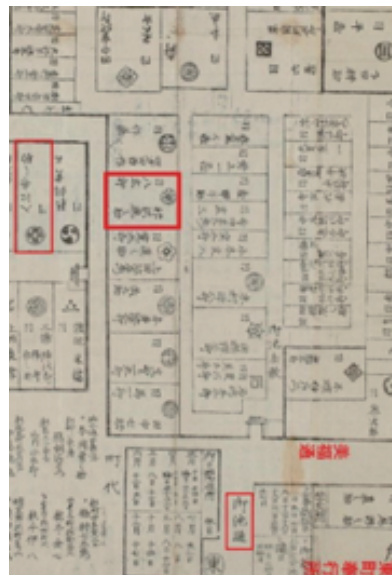
大丸屋 浮世絵



図③ 京都武鑑(慶応三年版)

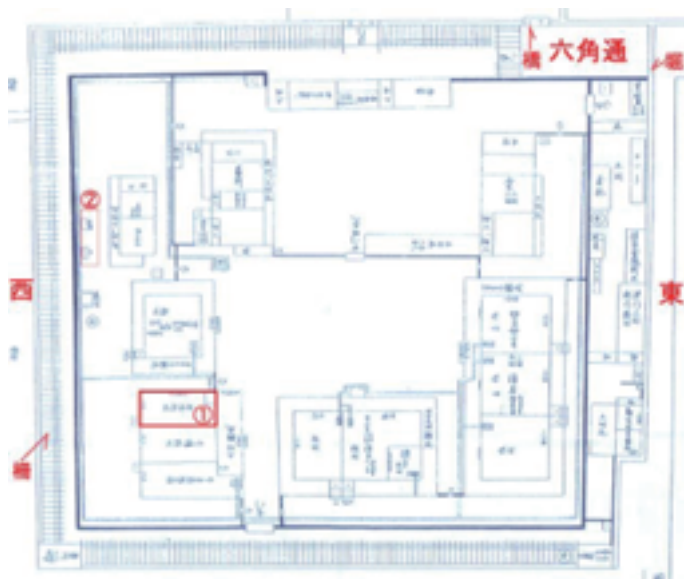


図④ 左図神沢・入江家付近の拡大





図⑤「大工頭中井家建築指図集 No.109「牢屋敷絵図(天明8年)」より



図⑥ 翁草 (活字本)

